



Title	坂口安吾「地方文化の確立について」論：『月刊にひがた』一九四六年三月号という〈磁場〉に注目して
Author(s)	田中，聡一
Citation	若手研究者フォーラム要旨集. 2023, 7, p. 67-70
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/91186
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

坂口安吾 「地方文化の確立について」論

—『月刊にひがた』一九四六年三月号という〈磁場〉に注目して—

日本文学・日本語史学 博士前期課程一年

田中 聡一

一、はじめに

本発表にて取り上げる作家・坂口安吾は、大原祐治の「巷間に流布する小説家・坂口安吾の一般的なイメージとは、敗戦直後の混乱期に評論「墮落論」および小説「白痴」を続けざまに発表して注目を集めたいわゆる「無頼派」の作家の一人、といったところだろう¹。という言に端的に表されているように、無頼、デカダン、墮落といった言葉で長らく語られてきた。そのためか、敗戦から「墮落論」（一九四六・四、『新潮』）までの、約八ヶ月間になされた仕事についての研究は多くない。ここで扱う「地方文化の確立について」は、『月刊にひがた』一九四六年二月号にて発表された小篇（五—七頁）であり、まさに当該期間に発表されたものである²。

本作では、農民批判を通じて「農村は純朴である」という「過去の常識」を疑い、それに「正しい考察を加へること」が主張される。そのうえで、「東京の亜流」にならず、「自主的な自覚」を持つことの重要性が主張されている。このような農民への言及は、安吾の敗戦直後の問題関心と符合するものであり、さらに『月刊にひがた』の発行には安吾が深く関与していた³。つまり、本作をめぐる安吾周辺の事実からは、安吾作品群における本作の重要性がうかがえるのである。

先行論では、本作の発掘者の若月忠信が、本作の主張内容を「時代の先取り」⁴としているように、普遍的な安吾像というべきようなものが読み取られてきたと言える⁵。

¹ 『戯作者の命脈——坂口安吾の文学精神』（二〇二二・五、春風社、二三四頁）

² 以降、『月刊にひがた』所収のテクストの引用は『月刊にひがた 復刻版 第1巻 1946年版①』（二〇一五・一一、三人社）からとする。判読不能字は適宜、他資料を参照して補った。また、山括弧の語句は強調の意を示す。旧字体を新字体に改めた箇所もある。

³ 兄・献吉宛書簡に、「今後重大な社会問題としては、失業対策として耕地問題即ち地主の土地分割という問題が提出せられると思いますが、（中略）ゴマ化しのきく論法や態度をとらず、日本永遠の観点に於て、対処発論せらるべき」（一九四五年九月一八日付）、「そこで思うに、この機会に、新聞社で、雑誌をだしてはどうでしょう」（同三〇日付）とある。書簡は『坂口安吾全集16』（二〇〇〇・四、筑摩書房、一二—一三頁）から引用した。

⁴ 「新潟の文化と坂口安吾」『国文学解釈と鑑賞 別冊』「坂口安吾と日本文化」（一九九九・九、至文堂、一三〇—一三五頁）

⁵ 村井紀「坂口安吾の日本文化論——天皇制・民衆・戦争——」『国文学解釈と鑑賞 別冊』「坂口安吾と日本文化」（二九—三六頁）、小熊英二『〈民主〉と〈愛国〉』（二〇〇二・一〇、新曜社、九七—九八頁）、中畑邦夫「辺境から普遍へ——坂口安吾の大衆論」『麗澤学際ジャーナル』（二〇一五・三、麗澤大学経済学会、一一五—一三〇頁）などを参照。

こうした議論は、柄谷行人の「歴史性を捨象することを意味するのではない」としつつも、「坂口安吾を戦後の風俗から切り離してみなければならぬ」という主張⁹との親和性が高い。これらは確かに、本作の可能性を広い射程に開くものであるが、しかし同時に、本作が敗戦直後のローカル・メディアに載ったテキストであるという基本的な事実から目を背ける事態に陥ってしまっていることも事実である。

その中で、本作を初めて『月刊にひがた』と結びつけて議論を行ったのは大原である。大原は本作について具体的な分析を施してはいないが、当時のローカル・メディア周辺の状況を整理し、本作あるいは『月刊にひがた』を、安吾がメディアで消費されるようになる前に、地方で議論が行われる「場を構築する」¹⁰ 試みとして評価している¹¹。

以上を踏まえると、本作を『月刊にひがた』一九四六年三月号に引き付けて考察する必要性が浮上する。というのも、誌面には「激動の農村を往く 待望する生きた政治 官僚主義を一擲して導け 現地報告座談会」（八一―一四頁、以下「座談会」）なる、現在進行形で農村の「現地報告」を行う記事が、本作の直後に掲載されているのみならず、新潟出身の安吾は、「東京」在住の「作家」として当該号では紹介されているからである。つまり、「墮落論」の作家・坂口安吾¹²というコード化された読みが成立し得ない場で、本作と関わりの深い記事が本作と連続して掲載されているのである。

ここで、一九四六年一月から四九年四月にかけて新潟日報社から出された『月刊にひがた』についてまとめると、次のようになる。すなわち、中央文壇とのコネクションを持ちつつ、中央（＝東京）でも新潟でもない「地方」との横の連携を図っていた。さらに、その運営にはGHQ/SCAPとの戦略的な関わりがあった。さらに、広範な地元（読者）を持つていたと思われる。本誌は「この時期の地方雑誌に特有の」、中央に対する「オランダティヴな回路」¹³を確保しようとしたものである¹⁴。

地元・新潟の農村について、新潟の有識者と新潟日報記者とで議論がなされている「座談会」と、中央＝「東京」の「作家」安吾の「地方文化の確立について」とが連続して収められていることは注目に値する。そして、敗戦直後における安吾の問題意識と符合する本作を、掲載誌に注目して考察することは、敗戦から「墮落論」までの八ヶ月を再考することになり、「坂口安吾を戦後の風俗」に結びつけて考える一助となる¹⁵。

⁹ 「墮落について」『新潮』（一九九八・一二、新潮社）。なお、柄谷は、『墮落論』でいわれていることは、実はすでに『青春論』（一九四二・一一―一二、『文学界』）に書かれている¹⁶とし、安吾のいう「墮落」を「他者との関係にさらされるということ」としている。

¹⁰ 「占領期におけるローカル・メディアと文学者——坂口安吾を視座として」『千葉大学人文学研究』（二〇二二・三、千葉大学文学部、八三―一一五頁）

¹¹ 『月刊にひがた』に関しては、大原祐治『月刊にひがた 復刻版 別冊 解題・総目次・執筆者索引』（二〇一六・一〇、三人社）および安藤宏・大原祐治・十重田裕一編『坂口安吾大事典』（二〇二二・六、勉誠社）第三部「事項編」「月刊にひがた」項（大原祐治、五八九頁）を参考にした。

二、「地方文化の確立について」の解釈

本作の特徴は、次の二点に集約される。一つ目は、冒頭から語り手「私」が、意識的に「私」と〈読者〉との一人称複数主体としての位相である「我々」を設定し、「私」と「我々」という「都会の連中」でも「農民」でもないオルタナティブな位相の主体を設けていること。二つ目は、議論の展開にて、「東京」「地方都市」「農村」という三項対立が設定されていることである。この「私」は「農村」に対し、「自主的な自覚」と「公共の観念」の二点の欠如を批判する。しかし、この「私」もかつてはその批判するところの、「自主的な自覚」の欠如した人物だったことが中盤で語られる。

以上を経た末尾では、先述の二つの特徴が顕著に立ち現れる。ここでは、「私」と「我々」とが交替を繰り返して議論が進み、テキストは複雑な構造を呈する。語り手の位相に注目して当該箇所を精緻に読み解くと、「私」が「我々」に呼びかける主張内容（現状の改良）が、まさに「私」の呼びかけ行為そのものに実践されていることが明らかになる。いわば、「私」は、「私」と重なりつつも異なる「我々」という位相を設定し、同時にその主張内容をパフォーマティヴに「我々」に呼びかけているのである。

ここには、「我々」が二項対立を超えたオルタナティブな位相にあることが不可分に機能しており、三項対立の図式と語りの位相とが不可分に機能していることを見て取ることが可能である。このことは『月刊にひがた』の方針である、中央でも新潟でもない「地方」との横の連携を図ることに答えるかたちとなっていよう。本作は、単なる農民批判論ではなく、むしろ戦略的な実践という側面を持つテキストであり、その構造は掲載誌の方針と符合しているのである。

三、『月刊にひがた』一九四六年三月号という〈磁場〉

以上、「地方文化の確立について」を語り手の位相という点に注目することで、「私」によるパフォーマティヴな語りが三項対立の図式と密接不可分に機能していることを主張した。では、この安吾の実践は本誌においていかなる位置を占めていたのか。

ここでは本作同様に、敗戦を迎えての今後の日本のあり方の指針（以下、「指針」）を提示している諸テキストの構造を見ていく。

まず、「座談会」では「自主的な自覚」、「公共の観念」の欠如といった、「地方文化の確立について」にて批判されていた「農村」「農民」のありようが、「現状の報告」というかたちで、図らずとも暴露されている。そして、その改良の提案という議論の展開も同様である。ただし、「座談会」では、議論の前提に「都会」と「農村」との二項対立がある。この点で、本作と「座談会」とには、決定的な差異が存在している。

では、このように重なりつつ異なる両者の関係性は、本誌においていかなる意味を持つのか。「指針」を提示する諸テキストとして、このほかに、春山行夫「時論 世界は日本を注視してゐる」（二―四頁）、平澤興「建設と破壊」「壊」（二五―二六頁）、「私の意見」の鹽田宇平「独立独歩」（三〇頁）の三つが挙げられる。

結論を述べると、これらはいずれも、議論の前提および展開に二項対立の図式を設定している。つまり、「地方文化の確立について」にて展開される議論と類似あるいは親和性のある他のテキストでは、二項対立のコードが採用されており、その点において本作は本誌の〈磁場〉（言説の力学が作動する場）において異質なものである。

四、おわりに

以上、安吾「地方文化の確立について」が『月刊にひがた』一九四六年三月号という〈磁場〉では異質なものであることを主張してきた。

『月刊にひがた』翌月号には、「山峡の農村に働く 東大勤労学生 of 感想」（一〇—一三頁）という記事が載っている。これは、「座談会」にて話題に上っていた「岩船の関谷村に昨年東京帝大の文科の学生約八十名ほど勤労奉仕に入つて来た」（一四頁）という言を受けてのものと思われる。このインタビュー記事では、「封建的な因習からあまり前進してないといはれる農村」（二〇頁）という編集部の言があるように、安吾の主張は部分的に共鳴している。しかし、この記事があくまでも「座談会」の延長線上にあること、ならびに、「都市」と「農村」との二項対立が堅持されていることを踏まえると、安吾の実践は完全には受容されていない。このことは、以降『月刊にひがた』で安吾のテキストが、一九四七年一月号の「当世らくがき帖」（一五頁）を除いて掲載されなくなることからも確認できる。たしかに、一九四六年四月以降、安吾は「墮落論」により文壇の寵児となった。このような安吾自身の事情もあつて、もはや「地方文化の確立」について考える余裕がなくなつていたことも事実であろう。

しかし、本作の主張に今一度立ち返ると、安吾の実践的議論は語りの構造上、達成不可能だったのかもしれない。というのも、「東京」の「作家」である安吾の主張を受け入れることは、構造的に「東京の亜流」にならざるを得ないからである。本作は、その戦略的に組み立てられたテキストでの実践的議論という意味で、『月刊にひがた』の中央でも新潟でもない「地方」との横の連携を図るという意図と共鳴はしていた。しかし、その実践は、テキストの構造上あるいは安吾個人の事情も相まってか、以降、十分に受け容れられなかったのである。

本作における安吾の実践は、「墮落論」の語りの構造を、パフォーミングな言語実践であると指摘した山根龍一の議論⁹を踏まえると、「墮落論」を準備するものであつたと言えるだろう。これは先述の「墮落論」以前の八ヶ月の再考という意味で重要である。

以上の掲載誌に注目した本作の考察からは、『月刊にひがた』一九四六年三月号という〈磁場〉では安吾の語りの実践が有効ではなかったが、しかしそれはひと月後の「墮落論」を準備するものであつたことが明らかになったと結論付けられる。

⁹ 座談会、鼎談を除いて、一九四六年に二八点、四七年に六三点を安吾は発表している。

¹⁰ 「墮落論」論——歴史と人間との関係をめぐる懐疑の方法について『架橋する言葉 坂口安吾と時代精神』（二〇二一・一二、翰林書房、一八八—二二頁）